

報告2 ラオス研修報告

～ラオスで障がい者就労事業に取り組む
アジアの障害者活動を支援する会を視察～

3/21～3/26まで、ラオスの都市ビエンチャンにて障がいのある人たちの就労支援を行なう、アジアの障害者活動を支援する会(以下:ADDP)の活動を見学してきました。

昨年の10月にはラオスからもぱれっとへ見学に来ています。代表の八代富子さん、東京本部の中村由希さん(八代さんの長女)より、現在ADDPでは身体や聴覚に障がいのある人を中心に雇用しており、今後は知的に障がいのある人も受け入れたいとの相談などを受け、今回の視察が実現しました。




■ADDPについて











ADDPは1992年に設立したNGOです。アジア各国にて障がい者スポーツや障がい者リーダー養成セミナーを振興してきました。その後ラオスの現状を知り、1997年から本格的にラオスでの活動を開始します。2011年にはNGO連携無償資金協力(支援期間3年)を受け、就労支援事業を立ち上げます。現在は外務省や在ラオス日本国大使館よりこの支援事業が評価され、来年7月までは継続して支援が受けられます。

■ラオスの福祉事情

ラオスでは政府を始め、一般的にも障がいのある人に対する考え方や支援は定着されていないようでした。障がい=身体障がいと思っている人も多く、現在は身体に障がいのある人への支援は行なわれつつも、戦争負傷者が中心のようです。その為、外見では分かりづらい知的に障がいのある人たちへの支援は後回しとなり、支援場所や訓練設備はほとんどありませんでした。さらに、知的や精神といった障がいの区分だけでなく「障がい」や「障がい者」の定義自体があまりされておらず、日本のように障害者手帳もなければ、障害者年金のような個人への資金援助もなく、街中はバリアフリーには程遠い状況でした。

研修の6日間は、八代さん、中村さんをはじめ、ラオス事務所の日本人スタッフ斎藤功一さんや日本語通訳のトンシンさんとともにADDPと関わりのある12箇所の見学をさせていただきました。

見学先 ①販売場所:  ②取引先:  ③福祉関係: 

| |
|---|
| ●ADDP 就労支援活動: 美容室・ベーカリー・パソコン印刷業務・車椅子修理(委託事業)。※今回は美容室、ベーカリーを中心に見学。 |
| ●知的障害者センター: 知的に障がいのある子どもをもつ親が立ち上げたセンター。  |
| ●ラオス障害者女性開発センター: 主に女性の障がいのある人を対象とした職業訓練所。  |
| ●シアボンミニマート: ADDPのクッキー工場から近い場所にある個人経営の商店。  |
| ●メコンレストラン: タイの観光客を中心とした大規模レストラン。  |
| ●トンマリケーキ: 夫婦で経営している現代風のおしゃれなカフェ。  |
| ●カフェ アマゾン: ラオスに進出したタイ資本の大手ガソリンスタンド直営のカフェ。  |
| ●ラオス国立大学: 大学内にある大きなフードコート。  |
| ●ビエンチャン自閉症センター: 自閉症児の父であるドイツ人が代表の自閉症センター。  |
| ●電力公社: 国営会社。(水曜日に社内販売)  |
| ●ラオス障害者当事者協会: 都市ビエンチャンの障害者団体、8団体を統括している。  |

■仕事が自信につながる(ADDP ベーカリー)

玄関を入るとおかし屋ぱれっとを思い出すクッキーの甘い香りがしてきます。ここでは身体や聴覚に障がいのある方7名とスタッフ4名(内日本人1名)が働いています。定期的に日本から来るパティシエの協力も得ながら、味にこだわった10種類のクッキーを製造・販売しています。現場は開所当初から働くベテランのマニチャンさんを中心に製造が行なわれていました。

中には、ADDPで働き始めた頃に比べると、表情や働く姿勢が変わってきた人もいるといいます。仲間がいること、仕事にや

りがいもてること、さらに家族をサポートする側になることが本人への自信につながるなど、ADDPの活動がいかに大きな役割を果たしているかが、彼らの生きいきと働く姿からも強く感じることができました。

■地域に根ざした働く場 (ADDP 美容室)

現在、2名の聴覚に障がいのある方と1名の現地スタッフが働いています。美容室に到着後すぐに髪を洗ってもらいました。指の腹を使っての丁寧なマッサージは、眠くなってしまうほど気持ちの良いものでした。

ラオスの女性は髪が長く、定期的に美容室で髪を洗う習慣があります。常連客の中には、3日に1回のペースで訪れる人もいなど、地域に根付いたお店でした。そして、彼女たちの丁寧な仕事ぶりからもプロとしての意識の高さを感じました。



【美容室にて
シャンプーの様子】

■見学先の様子

ラオス障害者女性開発センター

縫製・ペーパークラフト・織物・きのこの栽培・パソコン・焼き物のといった訓練作業の他、仕事の上で有利となる英語の講習なども行なっていました。代表チャンペンさんは、「このセンターで学んだ生徒は全県にたくさんおり、資金があればその人たちを支援し、さらに新しい人たちを育てられる」と障がいのある人たちの就労を広めたいという熱い思いを話してくれました。

ピエンチャン自閉症センター

ラオスでは障がいのある人たちの支援において支援者自身が専門的な知識を得ておらず、その人の知識範囲内で判断や支援さ

れる場合もあります。このセンターではタイからの協力を得て、スタッフが特別支援に関するノウハウを学び、利用者への個別支援も行なっています。そして、親同士が意見交換する場を設けたり、ファンド活動にも積極的に取り組んでいました。

知的障害者センター

現地の親の切実な思いを聞く貴重な時間を持つことができました。子どもたちの自立や就労の場、親亡き後など、国は違っても親の思いは同じでした。今回、ADDPが就労の受け入れについての考えを伝えると、ADDPの活動に期待し、前向きに関わろうとする親たちの様子が伺えました。



【利用者との
会話を楽しむ様子】

その他、取引先や販売場所にも同行させてもらい、地域のお店や大企業などの話から、ADDPの活動を理解し、応援や協力をしたいという気持ちが伝わってきました。

■最後に

今回、ラオスの社会を変えようとする取り組みADDPの活動から、ばれっとも30年前には同じような道を歩んできたのだと想像することができました。そして、自分のこととして置き換えた時、日本では障がいのある人が働くことが当たり前になった今、ばれっとの活動を通して、次は何を社会に伝えていかなければならないのか、私は何を伝えたいのか、改めて客観的に考えるきっかけとなりました。そしてADDPの皆さんをはじめ、今回お会いした方々が懸命に頑張る姿から私も力をいただきました。

(おかし屋ばれっと所長 長澤美佳)